# 婦人衛生雜誌

大正六年一月二十日發行

第三百二十六號

# 婦人衛生雜誌

## 第三百二十六號目次

# 謹告

來る一月二十七日(第四土曜日)午後一時より神田區一ツ橋通共立女子職業學校内に於て本會新年會を催し、修養倶樂部と聯合の上例會相開き候につき會員諸姉の御來會あらんことを。

當日は本會總裁宮妃殿下にも御臨場あらせらるべく、尙ほ左の講演及び餘興等も有之筈に候

○衛生講話　醫學博士　二木謙三君

○講談　早川貞水

其他

大正六年一月

私立大日本婦人衛生會

文部省普通學務局長 赤司鷹一郎氏序
日本兒童學會長醫學博士 片山國嘉氏序
文部督學官兼東京女子高等師範附屬高等女學校主事 槇山榮次氏序

唯一の學校賞與品
無二の家庭贈答品

東京帝國大學醫科大學助教授醫學博士 茂木藏之助氏
東京帝國大學醫科大學勤務醫學博士 太田孝之氏
日本兒童學會主幹 高島平三郎氏
東京女子高等師範學校教授 下田次郎氏
東京女子高等師範學校附屬小學校主事 藤井利譽氏
東京女子高等師範學校附屬幼稚園主事 安井哲子氏
推獎

大日本女子教育會幹事 石橋臥波編述

# 家庭學校 子女の用心

四六形全一冊
定價 父兄教師用 金拾八錢 兒童用 金八錢
郵稅金貳錢

○子女安全の道は本書に盡せり○

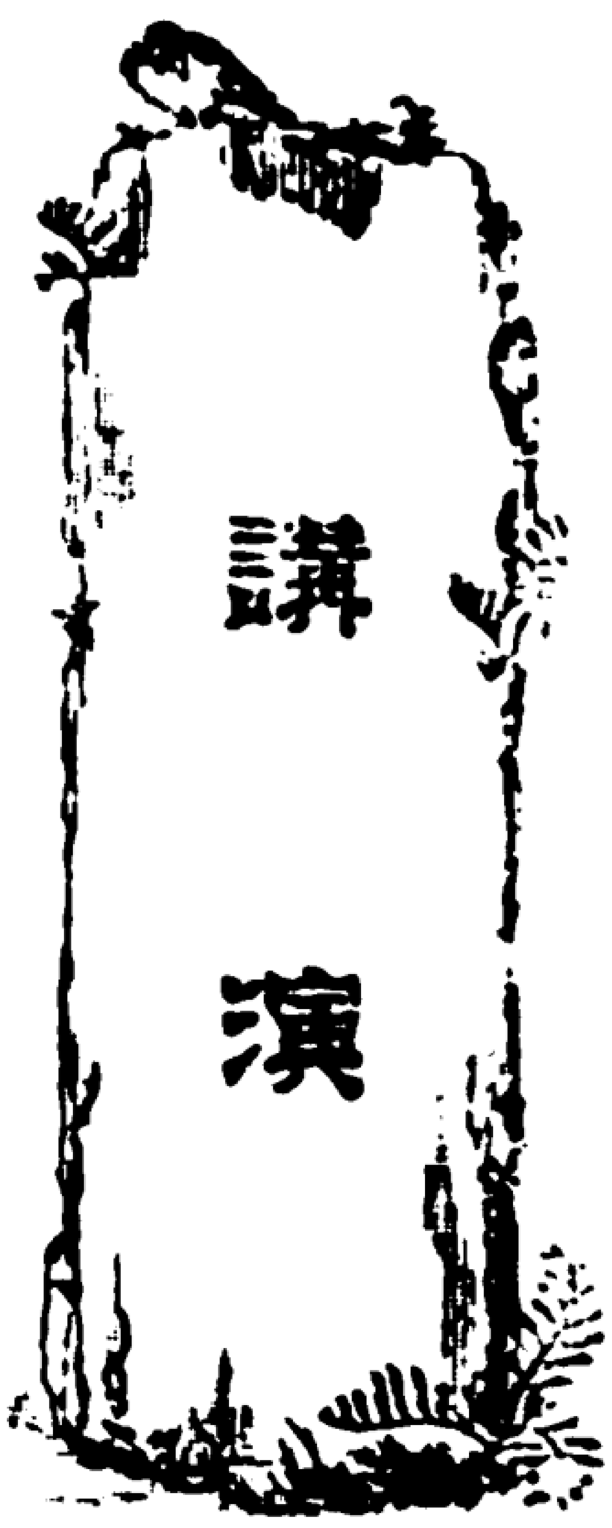
○多數取纏め御注文に對しては特に割引致候○女學校生徒特に家事科の參考用書に最も適切なり

拜啓 近頃、可愛ゆい子供が電車に轢かれ、或ひは學校の運動器具にて負傷し、遠足、修學旅行にて生命を失ふ兒童生徒のあるは、用心の缺けたるが爲に有之候。就ては、今回、家庭、屋外途上及び學校に於て、兒童生徒自身が用心すべき場合と事項とを、各方面より蒐錄し、小學三年以上中等學校の兒童生徒に讀ましめて、用心の習性を養はしむるために、極めて平易の口話體を以てし、更に父母教師の、乳兒時代より、中等學校生徒時代に至る子女の敎養上、注意すべき事項を列記し、尙子守、お附の心得に及び、特に、各學校家庭に於て、子女の怪我をしたる場合の應急手當と常備藥に就き、外科專門の茂木博士の談を載せ、一小册子として發表致候。極めて粗雜の物には候得共、子女の外傷的危險豫防の心得を示せるものは、本書が最初に有之候間、幸に、御一讀の榮を得て、不祥事の萬分一をも防ぐを得ば幸甚の至に御座候敬具

大正五年十二月

著者敬白

發行所 寶文館 東京市日本橋區本石町 振替口座東京二八〇
發賣所 人文社 東京市小石川區原町二三 振替口座東京一二四五〇




# 歐洲戰亂と婦人の將來

（修養俱樂部に於ける講演）

文學士　内ケ崎作三郎

一體戰爭は何故に起る者かと云ふ事を考へて見ると、いろ〳〵な原因があつて第一に戰爭は生存競爭の結果で當然の結果である、銘々自分の國を盛んにし、自分の國民だけ榮らくなりたいと云ふ考を以つて國民的利害の衝突、國民的慾望の衝突が戰爭を惹起すので、生物に生存競爭の絶えざる限り、人類の存する限り戰爭は絶えないものであると言ふ學者、政治家も少くはありませぬ、で吾々必ずしも之を否定するものではない、併しながら戰爭と云ふものは、觀樣に由つては恰も東京邊に於て行はれる、春秋の大掃除のやうなものであると思ふ、詰り塵芥を溜めて置く——毎日々々綺麗に片付けて、押つ付けて置くから、春秋の大掃除をする場合に澤山に集まつて來る、それと同じ樣に、若し如何なる國でも或は個人でも、如何なる團體でも、平素始終注意して人の國の邪魔にならないと同時に、自分の自覺する本能的手段を發展するやうに心懸けて居れば、又毎日毎日外交上の掛引を巧くして居れば戰爭にならないで濟むのである、併しながら人間と云ふ者は却々さうは行かないもので、兎角誤りがある、で先づ人間も百年の計を立てゝ居るところの人は甚だ少くない、世界に多くの大政治家があるけれども國家百年若は三百年の計を立てゝ政治を執る者は少くない、日本に觀ても支那に觀ても或は歐羅巴、亞米利加に

觀ても、大抵眼の前の議會とか、政黨の操縱を何うするとか、さう云ふやうな事が重てあります。日本民族が將來、何うなるかと云ふやうな事を考へて居る政治家は甚だ少ないと思ふのである、それは實に日本のみならず獨逸に於ても英吉利に於ても少ないのである。で非常に偉らい人物が現はれて、非常なる苦戰苦闘の精神を以て、世界のあらゆる精力を集めて人類の進歩發展の爲めに報ゆると云ふ偉らい人物が世の中に起つて、さうして各々國民と爭闘せざる限り戰爭は幾度か繰返さるゝべきものであらうと思ふ。であるから戰爭と云ふ者は折々起るべきものと思つて居らなければならぬ。理想と云ふものは戰爭を無くする爲めに骨を折らなければならぬ、併しながら現實の世界としては戰爭の折々起るべきもので、歐羅巴の大戰爭は世界の睨合と同樣な戰爭をしたと云ふやうに世の中の人は考へて居られませうが、歐洲戰爭と共に更に大なる戰爭が起るまいとも限らぬ、歐羅巴對亞細亞と云ふ大戰爭が起るかも知れない、吾々は之を豫防せむと努めて居る、併しながら不規則な人間の能力を以つて豫防することは出來ない、人間の智慧で補はふと云つたところが目の前の事しか解らない、明日の事も分らない、今日まで雨が二日半程續きましたが、一昨々日の晩の十二時頃までは非常に月が好かつた、次の日も好天氣だらうと思つて居つたところが、目を覺ますと雨滴れの音が聞える、彼の樣に霽れて居つた月夜が忽ちの内に雨が降出すと云ふやうに、二時間三時間先きの事が解らない、今朝まで彼の樣に降つて居つた雨が午後の二時頃より此通り晴渡るやうに、目前の事すら殆んど吾々には考へる事は出來ない、それで人間の知識と云ふ者は偉らいと云つても知れたもので、學者と雖も知るところ甚だ狹まいもので、本統に自分は何も知らないと、斯う思つて居つた時が知つて居るのである。そこで人間の智慧は一面に於て非常に偉らいけれども、一面に於て非常に不完全なものである、併しながら人間の不完全なる此知識或は見

識或は實行なりを、忽ち根本の力と云ふ者が善用するのである、此頃新らしい女の一人が男を刺したと云ふ、此刺したと云ふ事は實に馬鹿々々しい事で、新らしい事でも何んでもない、もう嫉妬の爲めに、煩悩の爲めに人を刺したと云ふのであつて、實に馬鹿氣た事である、併しながらあれは非常な教訓を與へるだらうと思ふ、あんな馬鹿氣た事をしてはならないと云ふやうに女達も考へて居らうし、あのやうな惡るい關係を有して居る男子は反省しつゝあると思ふのであります。さう云ふ意味に於て女が惡るい行をした爲めに、宇宙の根本の力と云ふものは之を善に轉じやうと云ふ、又轉じて行かうとするところの力と云ふ者が根本の素質として存在して居る。そこで人間は如何に過つても、その惡るいところをば宇宙の根本の力は善くしてやらうと思ふのである。

そこで戰爭は人を殺す、實に惡るい事で、切角斯樣に天が産んで呉れても殺されて仕舞ふと斯う思ふ。

そこで獨逸などでもどうせ子供を産んだところが彈丸の食物になつて仕舞ふから産まない方が良いと唱へて居る婦人があるさうであります、斯る事は英吉利にも佛蘭西にもある。で戰爭と云ふものは意味が無いかと云ふと意味は有る、何う云ふ意味があるかと云ふと戰爭のある毎に世の中が良くなる、良くなるのは何う云ふ譯であるかと云ふと淸潔に片付いて仕舞ふからである、戰爭と云ふごた〳〵騒ぎ、此騒ぎの生じて斯う良くなるので、戰爭其者は良い者ではない、人を殺し金を費す、併しながら人を殺し金を使うが、是は一種社會的に淸むる、社會國家と云ふ者を純潔ならしむる一つの大掃除の如き者であります、であるから戰爭の間に戰爭以前の社會的問題が起り或は人類の進歩が一層進歩發達すると云ふやうな事が往々にして現はれて來るのであります。

日本の神代の時代に於て婦人と云ふ者はなか〳〵豪らかつた、何故偉らいのであるかと云ふに伊邪那岐命、伊邪那美命、即ち男の命と女の命とが此日本の

神代に於て男女兩尊主義で、男も女も對立して居つたからである、天照皇大神は女ではありましたが、弟素盞嗚命を大に保護されたのであります。それから神功皇后も實に偉らいお方で、男と一緒に戰爭をなされた、と云ふ風で、神代の時代の婦人は我帝國の建設者となつたから、婦人の位置と云ふものは高くなつたのであります。ところが佛教が入つて來て以來、――佛教の方でも道元禪師、日本の曹洞宗の開山たる師は婦人と云ふ者は男と同じに見なければならぬ者であると云ふ教であるが、外の佛教に於ては婦人は汚がれた者であるとしてあつた、それは月々の月經、此月經が汚がれた者であると、斯う言はれて居つた、是は大なる間違で、汚がれたものでも何んでもないのであります。人間の生命を繫ぐと云ふ事に於て、何にも汚れたものではない。さう云ふ事は誤りで、高野山に登つてはならないとか、比叡山に登つてはならぬとか言つて居つた爲めに、日本の婦人は一面に於て進歩したけれども、一面に於ては餘程後くれを取つて居つた。それから支那の儒教が入つて來て、日本の婦人の尊敬しつゝあるところの人倫五常の道、是は支那の婦人より割出した思想が日本に行はれるやうになつたのである。戰國時代に於ては男子が戰ばかりして居つたから婦人は大分迷惑を蒙つたのです、併しながら男子を助ける實力の有る女は皆豪らかつたのであつて、常盤御前、平政子、巴御前等は自分の夫を扶け、自分の息子を助くる資格ある、相當の實力ある女子であつたのであります。今後に於ても矢張り斯くの如き人は偉らいと尊敬さるゝのであります。歐羅巴の歷史を見るに何うして婦人の位置を高めたかと云ふ研究すると、基督教が土臺ではあるが併しながらそればかりではない、今より千年ばかり前に十字軍の宗教戰爭が起つた、其時にゴットホルトと云ふ人が王樣に呼ばれましてエルザレムを恢復すべく命を受けまして戰爭を行りましたが、不幸にして幾度も戰爭は行りました、歐羅巴人が東の方に參りまして小亞細亞の

南のパレスタインの方に押寄せた、其時に澤山の男が死んだのである、其内には自分の數年連添うて居た夫もありませうし、又未來の夫となるべき人もあつたのでありませうが、此戰爭の間の留守居役は婦人が立派に致しましたからして婦人の權力と云ふ者が上つたので、一家の處理は男子より女子の方が實際力あると云ふ譯で、即ち、其婦人の實力が男子の留守中に發揮する機會を與へられたからであります。斯う云ふ前例を引いて此度の大戰爭が婦人に如何なる影響を與へるかと云ふ事を考へて見ると、必すや此大戰爭の結果として婦人の位置と云ふものは大に高まるだらうと云ふ事は疑ふ事は出來ないのであります。それは何故と申しまするに、學者の說もあるが、如何に今日の歐羅巴の交戰國に於ける婦人が働いて居るかと云ふ事が一つの原因である。でロイターと云ふ學者が演說をされた時に、一人の戰士が戰場に立つて働く爲めに國內に於て四人の男と三人の女が後押をして居らなければならぬと云ふ事を言はれて居る。一人の兵士を戰鬪地に於て戰かはしめて居る爲めに、火藥なり或は機械なり或は衣服なり食品なりを供給する爲めに國內に於て四人の男子が働かなければならない、今日歐羅巴の戰場に於て約二千萬人位の戰鬪員が居ると見れば一人に就て四人の割合で女が約八千萬人家庭で働いたり、或は工場に出掛けたり、或は病院に行つて働いて居る者もあらうし、家庭に働いて居る者もありませうが、是等の人の凡その計算ではあるが、八千萬人になる譯である。其外商店に於て或は電車や汽車の車掌になつて居つたり或は郵便局に勤めたりして居ると云ふやうに、今まで男が働いて居つた所を女が其仕事を引受けた者を計算すると非常な數になるだらうと思ふ。

今日は佛蘭西に於ても英吉利に於ても獨逸に於ても刈入は皆女の手で行つて居る、英吉利なども貴族の婦人が行つて居つて「土に歸れ」、「土地に歸れ」と云ふ事を叫んで、皆男の日常の仕度をして麥を刈入れ、

又麥を蒔いて居る、獨逸などに於ても近頃歸へつた人に聞いて見ると、少しの土地でもあると馬鈴薯を植ゑてゐる、それ故に多少土地に餘裕ある人は、門から玄關までも小麥を植ゑてあると云ふ事であるが、さう云ふ事を誰が行るかと云ふに、男を頼んで行つて居る暇がないし、其上に男手も無しするから、さう云ふやうな事を女が行つて居る、而して其元氣旺盛なる男は皆戰爭に出て働いて居るのであります。

此度の戰爭に由つて婦人は如何に實力を有して居るかと云ふ事を覺つて來た譯であつて、なんでも人間と云ふ者は、何か行つて見ない内は自分の豪らい事は分らない、なんでも事に當つてこそ成程自分には是だけの腕があると安心して自重する、さう云ふやうな譯で人間と云ふ者は何か行れば必ず自分の價値を發揮するものでありまして、此度の戰爭に由つて歐洲の婦人は或は工業に於て或は農業に於て、或は商業に於て或は病院の看護事業などに於て非常に働いて居るからして、婦人は吾々男子と讓らざる實力を有する者であると云ふ事を覺つたのである。今度の戰爭に於て婦人の痛切に感じた事は、婦人の組織力を有する事で、一體婦人と云ふ者は家庭を組織するのは當然であるが、然るに今度は家庭を組織するばかりでなく工場を組織して居り、病院を組織して居るのであります。又看護隊を組織して居り、或は消防隊を組織して居る、英吉利に於ては巡査を組織して居る、さう云ふやうに有らゆるものを組織して居るのである。そこで婦人は個人の力を認むるばかりではなく、組織力としての實力を認むるやうになつた、而して婦人と云ふ者は如何に優良な者であるかと云ふ事を實現して居るのであります。

斯くの如く女が男の留守の中に働いて、男と變りなく何でも行れる、少しも男子に讓らない、と云ふ事を英吉利に於ても佛蘭西に於ても獨逸に於ても露西亞に於ても婦人の多數は考へて居るのでありますからして、戰爭が濟んでも、此考は無くならないだ

らうと思ふのであります。未だ日本の婦人は是だけの實驗をした事はない、日淸戰爭にしても又日露戰爭と雖も――日露戰爭に於ても百萬人の日本男子が出征した位で、それで濟んだから苦痛と云ふものを味はつたとは言はれない、今日歐洲交戰國の婦人も其當時は苦痛を味ひ得たと云ふ事は出來なかつた、然るに今度の戰爭に由つて歐洲婦人は大なる犧牲を拂つて、彼等は自分の夫を失ひ或は愛兒を奪はれ或は未來を約して居つたところの者を失つた者が澤山あると云ふ風に、非常なる犧牲を拂つて居る。で此戰爭は誰に振り懸るかと云ふに卽ち一番多く婦人の一身に振懸るのであつて、此戰爭の爲めに最も禍を被むる者は婦人である、死んで行く者はどうでも宜い、それより後に遺された者は可憐想ではありませぬか、もう死んで行つた者は死人に口無しと諦らめて、死んで更に進化發達しつゝありと斯う云ふやうな意味合に於て諦らめる事が出來るが、遺された者は何うでありませう。今日日淸、日露戰役の爲めに保護者を失ひ一家を支ふるに苦しむ者は何れだけあるか知れない、夫に幾十幾百倍の苦しみある歐羅巴交戰國の婦人の苦しみ困難は如何でありませう。併しながら其苦しみ困難なる經驗に對して天は非常な物を與へるのである、それは卽ち婦人の自覺で此自覺に由つて婦人は實に偉らい、男に決して負けぬ、男の行る事は何んでも出來得ると考へるやうになつた。そこで佛蘭西の某大學敎授の說に、今後佛蘭西に於ては女の法律家と醫者とが多くなるだらうと言はれたさうである、戰後必ず法律及醫學に從事する事を豫期して、此二つの方面に於て婦人が職業を築かうと云ふ事を申して居るさうである、戰爭始まつて以來、暫らく鳴りを鎭めて居つたところの英吉利の婦人參政權の運動が、戰爭の後必ず續々起り、個人としての權利を男子と同じ樣に與へよと云ふ事を今より唱へて居る人があるさうであります。で是等は日本と西洋とは異つて居りますけれども、然しながら戰爭の後に、歐洲の婦人は如何に偉らい者にな

るだらうと云ふ事は吾々男子も――殊に婦人方は大に待設けて居なければならぬと思ふのであります。で次に結婚の問題を一寸申上げませう。此結婚の問題に就てはいろ〳〵の説が起つて居りますが、例へば英吉利などでは、男子が多く兵隊に取られた爲めで、今日では英吉利には女が多く、女四人に男一人と云ふ割合だと言つて居る。併しながら夫は主に老人や子供などを除いたところの計算かも知れないが、兎に角女四人に男一人の割合で、更に一層詳しく統計を取つて、結婚する事の出來る男と結婚する事の出來る女の割合を取ると、男一人に對して女六人である。娘一人に聟八人と云ふ事を言ひますが、娘六人に聟一人で、其男一人と云ふ内には孤兒もあれば、負傷兵、病兵、さう云ふ者を合せて言つたとすれば、健全なる婦人六人に對て男一人だと云ふ事で此重大なる問題が起つて來る。ところが日本にも支那にも此頃一夫多妻と云ふ事を唱へられて居るが西洋は一夫一婦で有名な國である。此一夫多妻と云ふ事は男が直に女の立場から唱へ出したのであるが一人の男に六人の女の割合であれば五人の女は結婚する事は出來ない、から一人の外に五人の女を合せて結婚するのであるが、さう云ふやうな一夫多妻論は珍らしい事ではない、歐洲は今さう云ふ事を言ふが東洋などでは皇宮に三千人の妃を召使はれたところの支那の如きは一夫多妻であるから東洋に於ては珍らしい事ではない、唯東洋に於ては珍らしくないが、之が西洋の間に起らむとするのは非常に不思議な問題であつて、獨逸などでは大阪毎日新聞の通信員が通信して居る通信に據ると、或る軍隊方の内に結婚局と云ふものが命令を發して子供を産ますと云ふ事を奬勵して何れだけの子供を産めば何うと云ふ風にして九月と十月に御褒美を賜はると云ふ事である、一體獨逸と云ふ國は私も長くは居らないが前後二年程獨逸を見て歸へつたので大國民である大に學ぶべき國民ではあるが、何方かと言へば新らしい文明に入つては居るが比較的野性を帶びて居る、先

程家庭のお話もありましたが、吾々も中流階級の家庭に居りましたから多少容子は知つて居る、彼方の婦人が麥酒をピシャ〲飲み男を蔑して什麼ふ禮儀とか云ふ事なども英吉利や亞米利加の婦人よりは構はないと云ふやうな者が多い、獨逸は佛蘭西や英吉利に較べて文化に於て多少新らしい國民ではあるが野性を帶びて居る、三百年前もルーテルの宗教改革の戰爭で獨逸の人口は五分の一に減つて仕舞つたのである、西洋人と云ふ奴は戰の好きな國民で兎角肉を喰つて居るから獸に近いところの國民で東洋の方は植物性の物を喰つて居るから植物的に溫厚に發達して居る。

それで獨逸は三十年戰爭の後政府が命令を下して教會が而かも黑幕のやうな法律を以つて一夫二妻と云ふことを強行せられた、斯くの如くして人口を增やせと云ふ事を政府が法律を以つて一妻多夫を奬勵して人口を殖やすと云ふ事は行ひ兼ねまじき國柄だと思つて居る、非常に其主義に於ては現實主義の國民で感情は充分に發達して居らない國で日本人のやうに思ひやりと云ふやうな點は充分に發達して居らない國である、それは何んと言つてもナポレヲンにさん〲苛められて百年の後に大帝國を組織したのであるから其處には餘程無理がある、であるから吾々東洋の日本などとは比較にはならないのである、ところが之に對しては大分反對論者があつて、人間を殖やす爲めに一夫一妻論のやうなナショナルズム國民的思想の基督教を標準とする政府の命だと云ふのは宗教道德を理想として考へるところの一の宗派と云ふやうな或は學者とか識者だとか云ふ階級の人々例へば基督教は非常な反對で、尤も基督教と云つても——日本も佛教國だと言つても其人々が實行して居る譯ではない、若し佛教的の教は絕對に禁酒主義であるから酒飲は佛陀の教に背く者で御釋迦樣の教は絕對に禁酒である、然るに日本人で酒を飲まない人は甚だ少くない、アルコールは國家の問題とまでなつて居るが、御大禮、神祭の時でも酒を用ひて居

るのであるから佛教國で佛陀釋迦の教はありても守らない、それと同じに西洋は基督教國ではあるが基督の教訓を守らない、日本は佛教國となつて上から信じろと云ひ、基督教を信じろと上から壓迫的に國家が宗教を信じろと云ふのであるから基督教と云ふものは西洋に形式的の信者が多いと考へられるのである、それであるから戰爭が起るので、釋迦の教を信じ或は歐羅巴大陸の國民が本當に基督の教を信じたならば戰爭は起らない、信じても實行されない人が世界到る所にあるからして戰爭が起るのである。それで一夫多妻の問題は眞面目な問題になつて來るのでありますが、併し或見識家、學者、思想家、文學者などの說を參考として歐羅巴に於て一夫多妻にはなり得ない、何故ならば一夫多妻に堪へない、幾ら國民の必要があるかも知れないが、見識ある婦人は讓歩が出來ない、要するに一夫多妻は不自然である、愛は獨占を要求するので、一念と一念とが獨占を要求する、男を刺殺すと云ふのも初は「理解ある靈界」だとか雜誌などに書いた者が結局女は女となつたので、理窟も何も無くなつて唯もう憎いから嫉妬を燒いて嫉妬心より男を刺したのであつてそこで矢張り女で其は矢張り女の偉らいところである、嫉妬心と云ふものも惡るい事ではない、男が外に飛出して仕方ないから嫉妬心を起す、男と云ふ者はどうも外に行きたがるから成るたけ家に引留めると云ふには或る程度までの嫉妬心は必要なもので、本當に夫を愛して燒かない人は愛の無い人であると云ふ併し今日までの東洋の道德は無論是には嵌まりますまいけれども、矢張り家庭が眞面目くさつてばかり居つてもいけない、一家互に笑らひ樂しむと云ふやうな事があれば男子が家を空虛にして飛出すと云ふ事もしないのである、そこで男子を引附けまするには婦人自ら修養して戴かなければならぬので、婦人が矢つ張り藝者とか何かに夫を取られないやうにするには一面に於て嫉妬も必要で、さう云ふ理想は實際の理想であるが、さう云ふ事は教科書には書いて

ないのであります、併し總て世の中の事は書物に書いてない事が必要で家庭の圓滿を保つのは男ばかりの責めではなく夫の道樂をするのも構はずに突出すと云ふやうな問題も誠心誠意と云ふやうな事ばかりではいけないと思ひます、其處は餘程人情を加味して行かなければならぬので、其場合嫉妬心も必要だと思ひます。

それで此一夫多妻と云ふものは不自然だから行はれない、例へば一夫多妻と云ふ事は子供が生れなければ宜しい、子供に關係の無い者ならば一夫多妻でも行けるかも知れないが、若し子供が生れたら誰が世話をする、それはやつぱり本當の產みの兩親に世話さるゝにあらざれば人格と云ふ者は發達する事は出來ない、今度の新聞にあるやうな事も子供の事などは考へないで、唯自分の本能と云ふ事、銘々の情慾の事ばかり考へて子供の事などは考へないからの事である、さう云ふ中に偶々子があつても其子供は不良少年になつたりして國家の邪魔になると云ふ事になる、で一夫多妻主義と云ふものは何うも行はれ惡くいのである、ところが戰爭前歐羅巴の婦人の傾向はどうしてあつたかと云ふと、結婚は或意味に於て非常に苦痛で日本でも段々仕度は何うだとか云ふ事を云ふやうになつて來たやうですが、西洋の結婚は――英吉利邊の結婚は家と家との結婚で決して日本人が考へて居るやうな自由戀愛などゝ云ふ事は中流以上の階級には行はれて居るものではない、男も女も家庭を持つは厄介で西洋の婦人は家庭に於て働かない、獨逸は兎に角金持が好きだ、英吉利でも佛蘭西でも早く金持にならなければ、無い袖は振れないと云ふ譯で質素な生活に甘んじて居るのであるが、西洋の人々は家庭と云ふ問題を輕蔑し過ぎて居る風潮は著しくなつたらうと思ふ、佛蘭西の巴里の婦人社會に於ての傾向は最も著しい、毎晩夜會に行くとか、舞踏に行くとか、遊興の爲に馳せられて行くとか云ふ風で、家庭に靜かな樂を送つて居る婦人は少なかつたのである、ところが此度の戰爭は

それ等の婦人に對して非常なる警告を與へたのであります。

例へば佛蘭西と獨逸の人口とを比較して見ると千八百七十年卽ち普佛戰爭の當時は佛蘭西も獨逸も共に約四千萬人の人口を有して居つた、然るに千九百十四年當時の人口は佛蘭西は千八百七十年以來四十四五年の間に人口は少しも增えない、それは何故かと言へば子供は二人あれば大抵澤山だと云つて生まない工夫をした、夫婦二人で二人の子供であるからどん／＼人口が殖える筈がない、其內に一人位死ぬから少くとも四人の子供を產まなければ國家の維持は出來ない、四人平均にしても或人は一人しかない人もあるから十人の數を平均して少くとも四人產まなければいけない、ところが獨逸の方は子供を生む人が多いので千八百七十年に於て四千萬人の人口が千九百十四年に於て六千五百萬人になつたのであつて、獨逸は殆んど二千五百萬人增えて居るのに佛蘭西では一向殖えない、そこで今度の戰爭は人と人との戰爭――數と數との戰爭から露西亞は或る軍人が豫言して居るのに露西亞は必ず最後は必ず勝つて見せると言うたさうですが、露西亞には澤山の人間が居るからで、一億以上の人口があるから獨逸より遙に人口が多い、そこで人の數で以つて獨逸を負かして見せると或將官が豫言したさうでありますが、それには多少の意味があると思ふのであります。

そこで人口を殖やすと云ふ事に餘り趣味を有つて居らない家庭の主義を執つて居つた佛蘭西の中流以上の婦人達は如何なる考をしたかと云うと今更の如く彼は巴里に於ける生活の薄ぺらなる事に氣が付いて彼等は田園に退いて自分の修養地に宛て靜かなる平和なる家庭を營んで贅澤を少くして健康と云ふ男女の生活に歸りたいと云ふ傾向が著しく佛蘭西婦人に於て起つて來たと云ふ事であります、そこで今まで巴里に居られた婦人達は戰爭で段々田舍に退いて立派に家庭を經營して自由を解するやうな事に興味を有つ人が多くなつたと云ふ事ですが、是は佛蘭西

の爲めに大に悅ぶべき事で、當時の戰爭に於て佛蘭西は一大進歩を爲すと思ふのであります。

英吉利の結婚の事であるが、近頃大分日本に於ても持參金が無ければならぬと云ふ風潮は少くとも東京に於ても餘程著しくなつたのであるが、英吉利や亞米利加に於てはもつと甚い、獨逸に於てももつと甚い、何故甚いかと云へば生活の標準が高かいから男子が自分の收入に出つてのみ相當の生活を營む事困難なるが故に妻の持參金より生ずる利息なり利益なりと云ふものを附加へなければ相當の對面を保つて行くことは困難である、必ずしも對面を支配するのでもないが對面を飾るだけに生活して行きたいと云ふところから男子が持參金を持つて來るところの婦人を要求するので、中流以下に於ては割合に少くないが中以上に於て隨分行はれて居る、獨逸邊では家具の事を「ミビル」家具一切を持つて行くので、大抵の家具は何から何まで持つて行く、臺所は細君が持つて行く、獨逸の下女は大抵兵隊さんの女房になると云ふやうに獨逸は女中でも何んでも金をせつせと蓄めて居る、結婚の爲めに家具一切を持つて行くと云ふ風である、ところが日本人は家具などが何うであらうが、裸體でも貰つて行ると云ふ風でなかなか氣前が良い、であるからさう云ふ氣前の良い人であるから獨逸人などが日本に行つて來る、ところが其處に行くと獨逸の大學の卒業生は財産の無い者は決して貰らはない、それは日本あたりとは異つて生活の程度が高いから多少の財産の有る者を貰らはなければ行つて行けない、唯大學教授の收入だけでは迚も贅澤な生活が出來ないと云ふのでそこで親の光りは七光りと云ふ事が男の身の上に於て最も有力なる諺であると思ふのであります。

そこで西洋に於ての結婚と云ふものは多少皆金を中心として居るが日本人は金を見て居ない、財産を一切無視して何うせ好きな女であれば何んでも宜い引取つて行ると云ふさう云ふやうな太腹で或は先見の明が無いと云ふ事が日本人の多くはさうであるが西

洋の男子には斯う云ふ事は少くないと思ふのである、曾て英吉利の外務大臣をした人がミストルと云ふ婦人と結婚をした、ところが戀愛の結婚をしたと言つて大變世間から褒められた、が日本なんかそんな事は何んでもない、喧々など媒酌人をした事がある、花嫁も花聟も金がないから蕎麥屋から蕎麥を取つて結婚式を擧げたと云ふ結婚式に僕等立合つた事がある、さう云ふ事は西洋にはない、そこで自由の結婚は多少不自然な事になるで、日本も近來は多少西洋風になりつゝあると云ふべきで、結婚式はやれ日比谷で行るとか云ふ風になつて來たのです、丁度西洋人が教會で行るのを日本も眞似て居ると云ふ風であるが日本の方は餘り單純過ぎるも少し結婚と云ふ事を複雜に考へても良いが西洋の方は又餘り複雜である然るに戰爭になると男だつて何時死ぬか解らない、何時までも戰爭は終らない、何うせ死ぬなら好きな人と結婚する方が良いと云ふ考になつて男の方でも財產とか女の美であるとか云ふ事よりも知識とか見識とか其人の交際振とかさう云ふやうな所に目を付ける者が多くなつて餘程見識を改めて單純なる結婚に立到らむとする傾向が英吉利に現はれて來たと云ふ事を或人が雜誌に載せて居るのを見ましたが是は大變良い事だと思ひます。

日本に於ても遙に西洋風に負けないところもある、男女の結婚式は唯飮んだり喰つたりして一週間披露會を行つて居るのがあるが、あれは酒の會で結婚式ではないと思ふ、結婚と云ふ事は人を御馳走することにあらずして花嫁花聟が精神的に理解して相互に尊敬してさうして協力して自分等の先祖を經營する健全子孫を生みまして天地のあらゆる組織的の力を以つて之を經營して行くと云ふところに結婚の大精神がなければならぬ、然るに動もすると結婚の本當の意義と云ふものが唯一種の交際機關であると云ふ如く虛榮心を滿足せしむるだけの基礎になると云ふ事は東西古今同じ事でありまする、英吉利は多少弊があつたのが此度の戰爭に於て大に改めらるゝやう

になつたと云ふ事は甚だ悦ぶべき現象であると思ふ。

そこで戰爭後は婦人の位置は何うなるかと考へて見ると舊思想と新思想との調和の光りに滿たされて、主婦――母として子供を育てると云ふ――是は東西古今を通じて變らざるところの婦人の天職であつて、此天職が復び歐羅巴に於て尊敬せられむとしつつあると云ふ事は人類の進歩發展の爲めに大に悦ばむければなりませぬ、併しながら其古き天職を爲さむとするところの婦人は新らしき理想を持つて更に彼等は男子と同じ智力があると云ふ事を自覺するやうになつて彼等多數に於ける一團は男子と同じ給料を與へられたしと要求して、男子が百圓の給料を取れば女子も與へられたしと云ふ事を叫ぶと云ふやうになつたのであるが、是等は婦人の自覺に據つて生じて來たのであります。

婦人は男子の玩具ではない、婦人は男子の奴隷ではない、併しながら男子の協力者であり或は婦人は男子の愛神なりと可愛がられる者ではない、尊敬しなければならぬ、卽ち男子の伴侶として協力者として又忠告者として舊き理想を新らしき理想に結付けてさうして新家庭の前途は精神の充溢るゝところの家庭を經營しなければならぬ、と云ふ決心を惹起すやうになつて來たと云ふ事は歐羅巴交戰國の見識あるところの婦人の傾向であると思ふ、此新傾向を以つて漸次學識の發展せむとする歐洲の婦人に對して日本の婦人は何を爲すべきであるか、日本婦人の長所美點は貴女方も自覺して居る又吾々も充分に認めて居るのである、が併しながら單に溫順しい一方ではいけない、身體も丈夫な人にならなければならない、強い立派な女であると共に強くして賢い女になると云ふ事が日本婦人の生命である、で日本に死產が多いと云ふ事を稻葉博士も言はれましたが、あれは男子の責任で子供が產れないと云ふ事は男子の責任だと云ふ事は西洋でも度々言つて居るが、子供が產れないと恥だと云ふが先づ子供を產まない婦人

は少くないけれども其罪は婦人に非ずして男子にあると云ふ、で子供が少しも産まれぬと云ふ事を以つて婦人を離別するやうな事が行はれた時代もあつたのですが——今はあまりそんな事はありませぬが婦人に對しては失禮な事と思ふのである、併しながら兎に角さう云ふ壓制に對しては泣寢入りになつて居らないで、矢張婦人は婦人の權利を主張しなければならぬと思ふ、けれども貞操を蹂躙されて千圓の訴訟を起すとか云ふやうなのはあんまり安過ぎると思ふ、五千とか一萬とか十萬とか一遍の訴訟事件で破産でもさしてやらなければ止まないと云ふ位な意氣込がなければならない、それを一千圓位何んにもなりやしませぬ、今日まで有名な金持は毎日一萬圓宛一年三百六十五萬圓戰爭の爲めに儲けると云ふ風に金持が多くなつて成金が澤山出來た、裸體一貫からぴか金金持になつたから成金と云ふので親讓りの財産を持て其財産を土臺にして金を儲けるのは成平だと云ふが、兎に角近來は金持が多くなつて、婦人は悪るい事をして男子に制裁を加へやうとするなら致命傷を與へる位でなければいけない、千兩函と云ふ物は昔は大した物であつたが今は千兩函などは價値の無い物である、さう云ふ事を日本の婦人は能く考へて世界に對する傾向に後くれないやうに努力しなければならないと思ふのである、先程まで降つて居つた雨が降りしきつて私の家は巣鴨でありますから却て富士の山が能く見える、富士山でも夕影と云ふものは本當に其美を現はす事が出來ないのである、

私の家は富士山が書齋からも見ゆるし、應接間からでも見えるし、私の家は富士見閣とでも言ふべき家で、山の頂まで見ゆる位であるが、あれですら光が悪るかつたり雨が降つたりすると如何に富士の白雪でも全く美を現はす事が出來ない、今度の歐羅巴の大戰爭と云ふものも二日半續いた雨の如く變化があり、二年も三年も四年も續くであらう、併しながら彼の多くの人々の犧牲、其間に費さるゝところの金等其爲めに惹起するところの國家民族の大損害の多

きにある、此戰爭の根本は天地の思想を動かすので、此戰爭の終はる時は戰爭以前よりも人間の理想は更に高まるに違ひない、朝の雨雲は何時しか晴れ亙つて斯くの如く美くしき日影が照輝いて來た如くに、慘澹たるところの大戰爭は人類に大成功を招きつゝあるのである、戰爭の大靑雲が散ずる時には其西の空と共に富士の山の明皎々たる雄々しき姿の現はるるが如く前途の理想は彌勝りて其光を放つに違ひない、歐洲交戰國の婦人は本能と理想とを合せ代表して必ず勃興するに違ひない、海を渉り山を越へて東洋の我同胞――貴女方と命を同じうするところの婦人達は斯くの如く雄大なる理想を以て勃興し來らむとする時、我日東帝國の婦人方は何を以て之に應ずべきか、料理の問題、家政、職業の問題を如何と云ふのである、然しながら民族は國家の發達と共に歐洲に比較して讓らざるところの大なる理想の光を與へられむと云ふ決心をされむ事を切に希望するのであります。（文責在記者）

## 叢談

# 換氣の話

醫學士　佐々木秀一

（一）日本人は換氣の必要を知らず。

昔の話に、小供を責める爲に箱の内に入れて泣叫ぶのを構はずに蓋を壓へ附けて居た。其内大分靜になつたので明けて見たら死んで居たと云ふのがある。近頃は、小供が箱の中に蟲を飼ふのを見て居ると空氣が通らないと死ぬからと云つて孔をあけて居る。理窟としての詳しい事は知らなくとも、人間にも動物にも新鮮な空氣が生活上、必要な事は普及的の常識とまでなつて居る。夫にも係らず箱の形が少し大きくなつて家屋となり室内となると、其内の空氣

の良否と云ふ觀念は大分薄らいで來て全く忘却される事も多いのである、尤も純粹の日本家屋には此問題は直接必要が餘り起らない、從つて日本人には室內空氣の交換卽ち換氣と云ふ事の必要を認知しない者も多數出來るのである。然し洋風の戸障子や洋風の家屋が多くなるに從つて斯かる知識も年一年と國民健康の上に甚だ必要を增して來る次第である。

(二) 換氣の必要な理由

人間は一分間に十五六回宛呼吸をして一日の內には隨分多量の空氣を吸ふので、酸素の目方だけにしても一日に八百瓦も必要なのである、吸込んだ酸素は體內で燃燒して不用な炭酸になつて呼出される。其呼出される炭酸の分量は大人一人が一時間に二十二餘「リーチル」である。其外、蠟燭一本が燃えて居ると一時間に十二「リーチル」の炭酸を出すし、一個の石油「ランプ」があれば一時間に六十「リーチル」の炭酸を出すし火鉢でも瓦斯「コンロ」でも相當に炭酸瓦斯を發生する、夫だけ必要な空氣中の酸素は消耗されて行く。故に惡くなつた炭酸含有の空氣を室外に追出して、酸素を多量に含む新鮮な外氣を室內に送込まなければならない卽ち換氣を行はなければ人體の健康が保てないのである。理窟としては炭酸瓦斯が惡いと云ふのであるが事實は人間の生活する室內には炭酸瓦斯以外にまだ〳〵種々の有害瓦斯が發生する呼吸からも火氣からも床の下からも壁の間からも便所からも出來るので換氣は甚だ重大な必要を見る。

(三) 換氣の健康上必要な分量

今爰に日本室の約八疊敷に相當する大きな箱があつて周圍を密閉したと假定して其內に成人一人が這入つて居るとすると丁度一時間で此室內の空氣は健康上不良になる。故に此箱內にて健康に生活仕ようとするには一時間每に一回宛空氣を入れ換へなければならない。一日中には二十四回交換を要する事になる、若し此內に成人二人住まうとすると三十分每に卽ち一日四十八回の交換を要する。又四疊半に相當

する密閉室だとするとやはり成人一人だけで三十分毎に一回即ち一時間二回の換氣を必要とし、約三疊敷の箱だとすれば一時間三回の換氣が必要になる。故に三疊敷に三人も居るとしたならば一時間九回の交換で七分時間毎に一回宛交換仕なければならない、すると最早明け放しも同樣な事になつて仕舞ふ。要するに厳に密閉した室に就て計算上の理窟から云ふと先づ斯の如くである。然し實際上の問題は此理窟とは大分相異して居る。

(四) 純日本室の換氣の模樣

日本でも關東、關西以南の氣候は實に佳良なものであつて、換氣に關する學問の發達した獨逸あたりの險惡な氣候とは較べものにならない。此日本本土の氣候に於ては夏は室内全部が明放同樣であつて換氣などと云ふ事は全然問題にならない、只だ夜間、雨戸を閉鎖した場合にだけ室内の空氣が衛生上少し惡くなる事がある許りである。次に春と秋とに於ては多少閉込められた室も出來るが一般から云へば換氣の必要は殆ど起らないと云つても良い。最後に冬であるが、關東及其以南の冬は如何に寒いと云つても障子を明け放して雪見の出來る程度であつて非活動的ではあるが火鉢や炬燵があれば凌げる程度である。障子の破れ目から寒風がピー〳〵唸を發して吹込むで居ても即刻、手入れの必要を感じない者も多い程度である。それに純日本式の家は相當な注意をして建築しても材料が木質であるので多少のユガミを生ずる。木材の節目に孔も出來る。木材が乾燥すると間隙が出來る。地震にゆられて柱と壁との間もすける。建築上、家根庇の所は大抵、通氣孔が出來て居る。床下には一般に空氣を通過させる。疊は甚だ良く空氣の通過するもので障子紙も相當に通氣が出來る。板張天井や牀板等には必ず多數の間隙がある。斯の如き次第故、純日本式家屋は到底以て密閉の出來ない構造で、よしんば雨戸を閉ても盛に空氣の交通が自然に行はれて居る、即ち自然換氣法が性來的に佳良に營まれて居る。總て空氣は暖まれば上

昇し、上昇した跡には下から寒い空氣が這入つて之を補ふ事は、「ストーフ」の煙突を見ても判る事であるが、普通の室内換氣の狀況は煙突と全く同一である。卽ち室内に人が居り火氣があれば夫だけ空氣は暖まる、暖りし空氣は上昇して天井の間隔より廂又は家根瓦の間を通過して室外に出で、其補充としては障子雨戶の間隙や牀下及疊の間より絶えず寒き空氣が侵入して自然換氣が行はれるのである。此自然換氣は室内と室外の溫度の差が著しい程盛に行はれるが故に冬季夜間、三疊敷の室に下女二人を寢かすとしても、健康上さのみの不都合を來さず、水鉢の如き裸火を室内に燃燒せしめたり、又は煙突の備へなき瓦斯「ストーフ」を室内に使用するも一程度迄は差支なきを得るのである。要するに純日本式家屋の殊に多少歪みたるものは換氣の點より論ずれば健康上甚だ賞賛すべき性質のものにして、只だ住人が寒氣に對する抵抗力さへ充分備はれば少しも不都合の認むべきなく、從つて此種の家に往する者には換氣に關する觀念などは殆ど發達しないのである。

(五) 西洋室内の換氣の模樣

爰に西洋室と云ふのは壁に荒壁や襖や紙障子や雨戶等を用ゐずして其代りに煉瓦や石や乃至緻密な塗壁か硝子を用ゐ、床も疊でなく緻密な板張か「レノリウム」を用ゐ、天井も之に準じたやうなを云ふので一般に自然換氣の出來惡いか又は殆ど出來ぬやうになつて居るのを云ふのである。斯う云ふ建築は獨逸や露西亞の如き寒國では氣候の上からも當然必要を生ずるのであるが日本の溫帶地方には生活上必ずしも必要ではない。只だ仕事の都合や耐火耐震上から日本にも追々出來るやうになつたのである。日本では既に昔から耐火の爲に煉瓦屋以上の構造を以て居る土藏がある土藏は密閉出來る構造で風孔や扉を開かなければ充分な空氣の流通は出來ない、是と同じく洋風家屋も窗を開くか通氣孔をあけて置かなければ自然換氣は充分に行はれない。若しも日本室と同樣の積りを以て西洋室に住まひ、通氣孔を造る事

を忘れたり、火鉢や無煙突煖爐の如き裸火を使用したりしたならば久しからずして種々な衞生上不良の結果を來たすに定まつて居る。換言すれば西洋室の如き自然換氣の惡い室に住まふ場合は是非とも相當な人工的換氣の方法を講じなければならないのである。純粹な西洋室でなくとも日本室の紙障子を硝子障子に代へ、粗糙な木材の代りに「ペンキ」塗りを用ゐ、又は壁や天井に厚い壁紙を張るが如き場合は著しく自然換氣を惡くするのであつて、夫に相當しただけの人工的換氣法の必要が起るのである。

(六)人工的換氣の方法

間隙だらけの日本室では普通の場合には人工換氣の必要はない、西洋室でも常に明け放して置かれる場合は其必要が殆ど無い。夜間や嚴寒時の如く窓の開放の出來ない場合に此方法の必要なのは前述の通りであるが、此人工換氣法にも種々ある。最も簡略なのは換氣の必要のある時にだけ窓を開くのである、暖まつた空氣は窓の上部から出て寒い新鮮な空氣は窓の下部から侵入する、此方法の惡い事は第一、窓の開閉に手數が掛つて困る。第二に寒冷な空氣の侵入が風の形をして來るので寒さを感じて困る。其代り最も簡略で何等の裝置も要らない。次に此風の形を改めて少し宛、皮膚に感じない程度に空氣を室内に導く爲めには、天井に特別な孔を設けて出口となし別に牀に特別な孔を設けて新鮮空氣の入口となすのである。つまり日本室の間隙の代りに一定の通路を造るのである、或は窓の上方に特設した開閉戸を適度に常に開いて置くのも同一式である。更に進んだ方法は電扇を應用したり類似の器械力を用ゐて人工的に換氣を行ふのである。火氣は總て換氣を促す器械力になるので「ストーフ」は又た一の人工的換氣器械と同一である。

(七)換氣法と暖室法との關係

換氣法は上述の如く冬季に於て殊に必要な問題であるが、空氣の交換が良いと云ふ事はつまり寒い外氣を多く室内に導くと云ふ事であつて、換氣が良けれ

ば寒い、反對に暖かに仕ようとすれば空氣が惡くなる、此兩者は冰炭相納れざるもので、是を調和する方法は暖室法である。適當な暖室法を行へば始めて充分な換氣が出來て寒くないのである。從つて西洋室では冬季どうしても暖室法無しには過ごされない譯になる。暖室法としては火鉢の如き裸火は自然換氣の惡い室では絶對に用ゐられない、火氣が人工換氣を營む分量よりかも其火氣が空氣を汚す分量の方が多い爲である。是非とも煖爐に煙突を設けて不良な燃燒瓦斯は室外に追出し、火氣だけを室内に採用するのでなくてはならない。此際、煙突は一種の吸引式換氣裝置にもなる。煖爐よりも更に進んだ良法は一定の場所で新鮮な空氣を適度に溫めて之に適度な濕氣を保たせて夫を各室内に送り込み、他の通氣孔からドシ／＼不良になつた空氣を排出せしむる所の空氣暖室法と云ふのである。尤も同樣な仕掛けは普通な室内煖爐にも小型に裝置する事は出來る。然し生憎く日本では未だ餘り行はれて居ない。

### （八）換氣の良否判斷法

空氣中の酸素や炭酸瓦斯は眼にも見えず鼻にも嗅げないので其分量を五感器で感知する事は出來ない。然し一般の室内空氣は炭酸瓦斯の外に、人類の呼氣の臭ひ、濕氣及黴の臭ひ各種燃燒よりの臭其他の臭氣を混有する場合多き故、時には單に此臭氣の蓄積の狀況で換氣の良否が大凡判斷出來る事もあるが鼻の感覺は直に馴れて仕舞つて判斷力を失ひ易いのである。學問上には普通は炭酸瓦斯の測定をして夫から換氣の良否を判斷する。即ち室内空氣に炭酸瓦斯が千分の一容以上あれば不良なものとするので室内に炭酸の發生が多くて夫に準じただけの換氣が不足して居る事が判る。又た換氣の分量を知ることは室内に故意に多量の炭酸を發生させ、自然の換氣狀態の儘に放置して一時間後に其炭酸瓦斯の減少した分量を測定し、夫から一時間に何程の換氣が行はれたかを計算するのである。然し斯の如き方法は一般家庭の婦人には一寸出來ないので、爰には甚だ簡便

な一方法を選べやう。夫は何の煙でも良いが煙草の煙で見るが便利である。例へば普通の日本室の六疊敷位の所で卷莨の一本を煙にすると、其時の風の强さや方向及び其室の換氣の狀態で勿論一定はしないが、大抵は十分時か十五分時も經過すると其煙は見えなくなる。之に反して硝子窓で閉された同大な室で試むると其煙は長い時間漂ふて居る。遂に煙の炭末は何處かに沈著して仕舞つても、室外から這入つて來て見ると莨の臭だけは依然として殘つて居る。そこで此室の窓を適度に開けて置くと十五分か二十分時に一本宛の卷莨を煙にしても其煙が籠らなくなる。私は此位の程度の換氣を先づ佳良なものと見て居る。此際若し煙突附きの煖爐が室内に燃えて居れば窓は開けて置かずとも此位の換氣は自然に行はれるのである。斯の如き換氣判斷法は勿論完全では無いが、簡便で甚だ良い目安と信ずる。少なくとも斯んな事で換氣に關して、言ひ換ゆれば呼吸及全身の衞生に關する觀念が出來れば健康上又は病氣の治療及び看護上甚だ好都合と思ふ。

## 精神と疾病

佐渡　竹中成憲

『精神』の疾病は『心』の病にして俗に『神經病』といふ、卽ち『狂』の事なり。此種の病氣は別問題として『肉體の疾病』卽ち普通『病氣』と稱するものと精神の關係を述べて社會一部の人の參考に供せむとす。

精神と肉體は一見別物にして肉體の疾病には精神之に與らざるが如く見え、肉體の疾病に在ては肉體に治療を加ふれば足れりと爲す事普通一般の所見なる矣。

然れども精神と肉體の疾病との間には頗る密接なる關係あり。諸般の生理的及び病理的方面に及ぼす所僅少ならず、左に之を證さむ。

胃の消化の試驗の爲め動物を牢中に監禁し、之に試

驗的食物を與へ、其消化の力を試したりとて之ハ實際とは沒交涉のものなり。卽ち不愉快なる境遇に於て美食したりとて豫期の效能は無きものとす。
肉類を好まざるものに肉類を與ふるよりも本人が野菜を好むならば野菜を與ふるを可とす、澤庵漬の如き其滋養疑はしきものにても之に依て初めて病後の衰弱を恢復するものあり。
故に分析上立派なる滋養物を採らしむるも本人平生の嗜好如何に依りては學問上の豫期と非常なる差違を生ずる事あり。
精神の影響の大患を醸し得る事は驚くべきもので、糖尿病(小便の甘くなる病)及びバゼドー氏病(眼の球の飛び出て頸の脹る病)の如きは精神感動の爲め起る事を得。其他數種の病氣が精神感動の爲め其經過に不良なる結果を來す事は事實にしてピール、ナツキー氏は戰地に於ける「腸チフス」の經過惡しきは安んずる所なきためであると信じたり。
ビエガン、スキー氏は氣質の精穩にして興奮し難き性質の患者は結核に罹りても經過良好なる事を記せり。
德川時代の醫、黑澤揮の「治癆篇」(癆とは肺結核卽ち肺病なり)にも左の如く記す。
「癆瘵は氣疾なり、氣を轉すれば除去するを得べし、必死を妄信し、氣先づ畏縮し、遂に起つべからざるを致す。
此病に罹りて死するもの四矣。
醫之を殺す。
醫書之を殺す。
親戚之を殺す。
自から求めて死す。
此病を治す灸藥ありと雖、唯其氣を養ふを以て主とす」(以上諸出典田中香涯兄に據る。兄は這般の研究に頗る務めらる。)
齒の弱くして硬き物は一切之を嚙む事不可能なる人にして平生其人の好む所のものならしめば能く豆なり、餅なり、强飯なり之を嚙み得るものなり。

鰻大好の人に鰻の蒲燒を喰せ、後「今君の喰ひしものは蛇なり」と告ぐれば全部之を吐く事なきにあらず。

又特異の性質とはいひながら小生の伯父は一片の西瓜を食すれば必らず之を吐けり、又目下小生の扱ひ居る小女は腸「チフス」に罹り居るものなるが今は勿論平生健康時たりとも鷄卵は生にては勿論、煮るも亦每回之を吐す。

實に驚怖のみならず歡喜すら人を殺す事あり、長時其子に相逢はざりし母が急に其子の歸來に會し夢かとばかり喜びたる瞬間、頓死する事あり、是心臟痲痺に罹るものなり。

夫れ精神の作用たるや實に斯の如きものなり。

以上は皆肉體が精神の感動を受けて非常なる刺戟の爲めに一時變動を來し病あらば或は治癒し又は輕快する事を得るを示すものにして醫學(メヂカル、サイアンス)の上には馬耳東風たるものにして必らずや永久的のものにあらず。

這般の範圍に於て人の信仰を買ふものは必らず「手練」(デキステリチー)あつて患者喪心の間に例之指の先の作用迅速にして患者は觸れられたるを識らず、鍛へたる指は例之ば齒醫の器具よりもより以上の働を奏するが如き其一例なり忘るべからず。其他「暗示」といふ事あり。是は治療を受くるに當て施術又は藥劑を與へらるゝ場合に、患者が其技術者殊に人格を信用して此施術(此藥劑)が必らず效あるものと(患者自身が)確信するに因て效ある事實のあるをいふものにして患者自身が自から左樣信仰するもの之を(自家暗示)と稱す。

例へば『おこり』(マラリア)といふ病氣がある、之を治するには「キナエン」を用ふれば必らず治る、是は患者が醫者も「キナエン」も信用しなくとも良し、必らず治るのである。

之に反し每日疼痛又は其他の理由のために「モルヒ子」の注射を受くる患者ありと假定し、醫師は其有害なるを知るため、普通の『水』を注射する事あり、

是でも患者は輕快して滿足す。
前者は科學的にして『おこり』の蟲が「キナエン」の爲にやられるので何等不可思議はない、後者は精神作用にて之を「暗示」（サッジエスチョン）といふ。
此「暗示」に依つて官能的疾患（解剖上卽ち機質的に變化なく、只臟器の働に故障ある病）の治癒し得べき事は素より明で此『精神的療法』に依て便祕、月經故障、頭痛、神經痛、消化障碍（胃病）、舞踏病（神經の一症）の治癒したる實例はベルンハイム氏、フホール氏等の學者に依て實驗せられたるのみならず、キヨーレル氏及びペール氏は暗示を以て患者の體溫を昇降せしめたる數多の實驗を有す。
左れば宗敎の如き精神を支配する者が精神上のみならず、肉體の上にも亦偉大なる影響を及ぼすものたるは明なり。故に洋の東西を問はず宗敎は必らず治病の術を含有す、佛敎の如きも俗間の信仰を博さむが爲め、釋迦の滅後僞作せられたる經典もあるべけれど迷信を助長したるは事實にして開祖は多く奇術、魔術の先生なりき。
米國エッデー夫人の創設に係る「クリスチヤン、サイアンス」といふ一種の宗敎團體は疾病を以て罪惡より起るものとし、信仰と祈禱とに依りて病の全治すべきことを稱ふ、是、我國の天理敎の開祖中山みき子と殆ど同一なるものなり。
マーク、コムトの創設したる「イムマニユエル、チアーチ、ムーブメント」といふ一派がある、是は官能的神經症に對して信仰祈禱の效力を認めて居る。
米國の怪僧ダーウキイの創立したる「クリスチアン、カソリック、チヤチ」なる一派がある、其『祈禱療法（プレーヤー、クユアー）』は醫學を絕對的に排斥し、祈禱のみに依りて萬病を治し得べきことを主唱す。
大正六年となる今日黑住敎、金光敎の如き全國を通じて百萬以上天理敎の如きに五百萬以上の信者あり、神が信者に恩寵を與へ、災禍を去るの外、病を治すと信ずるものなれども精神療法を以ては機質的變化の在る病氣卽ち肺病、肋膜炎、心臟病、腎臟病

其他殆んど四百四病の四百までは治するものにあらず。神經病卽ち狂氣すら解剖すれば近時は顯微鏡を以て變化を認む。

以上論じ來れば學問(科學卽ちサイアンス)の進步に伴ひ精神的療法(卽ち一種の迷信)は漸々減退し唯物論を信ずるやうなるなり。換言すれば學問のなきものにあらざれば精神療法は效なきなり「いわしの頭も信心がら」といへる千古の金言は學問の進步と共に信仰を失はざるべからず。吾人が敎育を加ふる所以のものは頭腦に學問を注入するなり、學問を注入されたる頭腦は古き宗敎の魔術も之を信ずるにあらずして只歷史として興味を以て迎ふるのみ恰も茶人の骨董を弄するが如し

（完）

# 我國婦人衛生の必要を論ず

醫學士　山崎清

凡そ一家は親子兄弟等より成立し、一町村は此の各家庭の集合にして、一郡は町村の集りよりなり、而して幾つかの郡集りて一縣をなし、數十縣の集合よりして我日本帝國を成す、此れ何人も熟知の事である、然らば此一家の基礎たる各個人は如何と云ふに、我身體は腦、心臟、肺臟、肝臟、腸、四肢、五官器等よりなる、此各臟器は一個の細胞と稱するものより成立するのである、此れ人體に限らず高等動物並びに下等動物、植物に於ても同樣である。

而して我日本帝國の繁榮を計るには勿論地方自治の制度完成を期し、富國强兵の策を講ず可きである、然し如何に國を富まさんとするも此根本ともなり、基礎ともなる可き各個人の健康を計らざらんには健

全なる一家成立は難く、從て國家成立強固ならず、敗滅に終るは明瞭なることである、我政府茲に顧みる所ありてか昨年來保健調査會なるものを成立し、各專門家をして目下調査中である、依て近き將來には其業績は我國を益する所大ならんと思ふ。

次で起る問題たる健全なる各個人の増減如何は國勢の消長に關すること明瞭である、然らば我國の人口増加率は如何なる狀態なるか、先年中川衛生局長の調査に依れば遺憾ながら我國人口増加率は減少の傾向なりと。

凡そ人口の増減は國の何れを問はず出産率と死亡率とに關係す、即ち出産多くして死亡率少ければ人口は年毎に増加す、此れに反して死亡率多く出産率少ければ人口は年々減退するのである、而して出産率大ならず死亡率も大ならずば人口の増加は餘り大ならず。

英國の出産率は最近四十年間に三分の一に減じ、佛國にては最近九十五年間に五分の二を失ひ、獨逸は最近三十五年間に四分の一を失へり、然るに英國及び獨逸兩國にては出産率の減少を見しも死亡率減じたるを以て人口は多少増加を來たせり、佛國は出産率減じ且つ死亡率の減じ方著しからざる爲め人口の増加を見ぬのである。

我國の出産率は多少増加するも死亡率年々増加の傾向あるを以て遺憾ながら人口増加率は次第に減ずるのである、人口増減は恰も金錢の收支の關係と同樣である、如何に多額の收入ありとも、それ以上の支出あらんには收支の差引上缺損を免ぬかれぬと、同樣に我國の如く假りに出産率は多少増加するも死亡率年々増加の傾向あらんには到底人口増加率の増加を見ること難きは明かなることとなり、然らば我國の人口増加を計るには如何と云ふに申す迄も無く死亡率の減少を計る可きである。

我國人口増加率の減少の原因たる死亡率増加は年若き男女の死亡多きに因るのである。

我國四十年前は人口千に對し死亡率十六内外なりし

が、現今は二十に昇り、英、佛、獨は最近四十年間に死亡率三分一を減じたり、然るに我國は三分一の増加を見たる爲めに人口増加率の減少を來たせり。英國及び獨逸の死亡率の減少は若年者の死亡數の著しき減少に因る、佛國は小兒の死亡著しき減少により死亡率低くなれり、此れに反して我國にては小兒及び若年者の死亡增加により總死亡率の高きを示せり。

歐洲の平均年齢は次第に長くなりつゝあるのに、我國にては短縮の傾向を呈す、明治二十四年頃の平均年齢三十六、七歳が現今にては三十歳內外となれり。

上述せし如く生産率の減退は各國に共有的にあるも、死亡率の増加は獨り我國に於てのみ多きは實に慨嘆の至りである、此れ宜敷長壽法を講ず可きなり、勿論大隈侯の百二十五歳説は大に贊同して各自が長命を保ち一家をして益々繁榮を計り引いては我國の富を増す一策となるのである。

我國にては幼年期に死亡率高きことは既に述べたるが幼年期中にても殊に一歳未滿の嬰兒の死亡數の多きは世界に例の少いのである、此れ大にしては國家存亡にも重大なる關係を有するは勿論なれども、此れを小にしては我國の美風として誇る可き家族制度の念強き、因襲に捕はれたる觀念強固なる國民にありては一家の子孫斷絶することは先祖に對し相濟まぬ事になる、尤も嬰兒死亡原因に就ては其關係する所大なるを以て何れ項を改めて述べる積りである。

次ぎに男女の壽命を比較せんに我國に於ける女子の短命なることは世界に類例なき次第である、我國最近の統計に依れば生産的年齢殊に十五歳より四十歳の女子死亡率は男子の其れに比して多い、此れ歐洲に於けると反對なる現象なり。

先年御大典の節我國の長壽者に對し宮中より御下賜品ありて、其姓名等が雜誌等により發表されたが、其時の長壽者は女子に比較的多い樣に記憶する、然し長年者が女子に多いと申しても決して安心は出來

ぬのである、人生の中尤も活動力に富める、生産力の多き、一家の主婦として母として大切なる二十歳乃至四十歳の女子に死亡が多い樣では實に心細いことである。

明治四十一年度の調査にて十五歳乃至四十歳の死亡者中女子は男子より二割強の多數を占めてをる、斯くの如きことは英國に於ては見られないのである。我國にては明治三十四年頃迄は先進國と同樣女子の死亡率は男子より低かりしが明治三十五、六年度より俄かに逆轉して女子死亡率が男子より多くなりたり。

前述せし如く此十五乃至四十歳の女子は婦人の天職を盡す可き大切なる妊娠期である故に死亡者の多き爲めに死亡率增加の原因となるのみならず、同時に出産率の減退を招くのである、依て余は一般衞生を說くとしても殊に婦人衞生の必要を感じ、諸婦人方が今迄述べしことを參考せられて婦人衞生を重じ長壽法を講じ、我國の生産率を高めると同時に死亡率を減ぜられんことを望むのである。

彼の經濟學者として有名なるマルサス氏の說卽ち人間は年々等差級數を以て增加するのに、食料品は等比級數を以て增す故に結局食料品の缺乏を來す時期至るを以て今の内人間を制限す可しと云ふ、此れ經濟學者の說としては可ならんも苟しくも我々醫學に志す者殊に産科醫の立ち場としては雙手を擧げて贊同は致し兼ぬるのである、卽ち假令へ弱者にせよ、不具者にせよ苟しくも命を受けてる以上醫者としては弱者は強者にせんとし、不具者は健全なる者に爲さんとす、病者は健康者に復せんと勸むるのである此れ醫者としての本分であり、又た職業である、例へば一家庭に出産多いとしてもマルサス氏の說の如く出産を制限す可きでない、又た醫者としても其れ丈けの勇氣はない、今假りに十ケ月未滿の胎兒母體内にありて危險に迫りてあらんか、勿論滿十ケ月にして分娩するよりも産後保育するには困難なるにせよ、産科醫としては如何にかして健全に分娩を遂げ

しめんかと種々施術を工夫するのである、若しマルサス氏說の如くば一層斯くの如き十ケ月未滿者は假令分娩するも發育困難なるを以て其胎兒の生命を犠牲にす可しと說くであらう、此れ醫學に志す者と其意見を異する所である、我國婦人死亡率多きは先きに述べしが、斯くの如く若き婦人の死亡原因は何かと云ふ問題は當然起り來るのである、今男子と女子と生理的方面を比較せんに女子に於ては成熟期に至るや月經來潮す、此月經が精神的及び身體的に及ぼす影響は過日本誌上に述べた如くである、又た婦人の天職たる妊娠、分娩、產褥等が起り來るのである、依て多數の婦人の中には妊娠中死亡するもあらん、分娩に際し生命を奪はれることもあらん、又た產褥熱にて斃れる方もあらん、此妊娠、分娩、產褥に於ける死亡に就ては他日述べる機會あらんと思ふ。

斯くの如く妊娠、分娩、產褥等に際し死亡すれば男子には無くして婦人にのみある現象である、然らば此れを以て婦人死亡率が男子死亡率より高きかと申すと否な其れのみでないのである、勿論此事により斃れる婦人は數少くない、然し婦人死亡數より此妊娠、分娩、產褥等に於ける死亡數を差引いて見るに尙ほ男子死亡數より多いのである此れは他に原因を求む可きなり。

內務省衛生局の統計報告に依れば結核病殊に肺病に依る婦人死亡が男子の夫れに比し甚しく多數にして殊に十五歲乃至四十歲、就中十五歲乃至三十歲の婦人死亡は年々增加しつゝあることである、此れが爲めに妊娠、分娩、產褥等に依る死亡の外に婦人死亡率を高むる最大原因となるのである、結核は必すしも產褥熱の如く婦人に特有の病氣ならざるも其數に於て多きは否定する事能はず故に我國の人口增加率を增進するには生產率を高め他方死亡率を減少せしむる爲めに特に婦人の死亡率就中妊娠、分娩、產褥等に對するの外結核病に對する衛生を守り以て婦人死亡率の低減を計り同時に生產率を高め以て我國の人口增加率を高め可きである、斯くの如き衛生

思想の發達は各婦人の意志如何に依るのである、尤も本誌は此意志に基づいて我國婦人の衛生思想の發達を遂げたい目的に外ならないと思ふのである。

# 呼吸器病の豫防法及治療法

醫學士　篠原昌治

呼吸器病は其數が極めて多くありますけれど、其主なるものは鼻加答兒、咽頭加答兒、氣管枝加答兒、肺炎、肺結核、肋膜炎等であります。呼吸器病は寒い時季及び氣候の變化多き時期に罹り易いものでありまして、老幼男女何れも此病氣に侵さるゝものでありますけれど、腺病質のものや身體虚弱なるものは殊に之に罹り易い傾向を有するものであります。一度此病氣に罹りますれば、其後は度々罹る樣になることがあります。初めは極めて輕微な咽加答兒や咽頭加答兒の樣なものでも油斷をすればそれが氣管支加答兒となり。遂には其他の重症呼吸器病を續發することがあります。夫故に此呼吸器病に罹らぬ樣に之を豫防することゝ、一旦之に罹つた場合には速に之を治癒すと云ふことは最も大切なことであります。夫故私は爰に其豫防法と治療法を申上げたいと思ひます。然し之を各々の疾病に就て申上げれば餘り長くなりますから、唯一般的に如何にすれば斯る病氣に罹ることを豫防することが出來るか、又斯る病氣に侵された場合には如何なる注意を以て治療すればよいかと云ふ事について申上げる積りであります。

呼吸器病の内でも、其發生が極めて急劇でありまして、之に對して一定の豫防法を行ふことが、出來兼ぬるものもあります、例へば急性肺炎の如きものであります、然し肺炎は以前にも申上げました通り、一種の微菌によつて起る病氣でありまして、其原因となるべき黴菌はよく分つてをります。夫故これが

豫防も容易に出來さうに思はれますけれど、肺炎の黴菌は元來健康なる人の口腔にも居るものでありまして、それが如何なる動機によつて肺炎を起すかと云ふことがよく分りませんから、從て其豫防法を講ずることが出來兼ぬるものであります。

傳染性の呼吸器疾患、例へば百日咳、流行性感冒其他之に類似の疾患に於きましては、急性傳染病と同じく患者を隔離し、又患者の觸れたる器物を消毒すると云ふ事が大切であります。百日咳は吾邦のものは死亡率比較的少なく甚しく危險のものではありませんけれど、一旦此病氣に罹りますれば如何なる治療法を行ふも容易に治癒しませんで患者は非常に困難するものでありますから、之に罹らぬ樣にすることが大切であります。夫故もし近處に百日咳の患兒があつたならば可成小供をそれに接近せぬ樣にし、又一家の中で一人の小兒が此病氣に罹つた際には、事情が許すならば、之を隔離することが最も緊要であります。流行性感冒は傳染性のものであると云ふことはよく知られて居りますけれど、さりとてこれが豫防法を講せらるゝ人は極めて稀であります、それは一つは此病氣は如何にして豫防すべきものであるかと云ふことが分らぬ事と、又一つには此病氣は左程危險な病氣でないから之に罹つても餘り心配することもないと云ふ樣なことからであります、流行性感冒は元來良性の病氣でありまして普通數日の間に治癒するものでありますけれど、流行性感冒でも時とすれば比較的重症のものが流行することもありますし、又老人とか身體虛弱のものでありますれば肺炎などを續發して極めて危險のことがありますからこれに罹らぬ樣にすることが最も大切であります、それには矢張患者を可成隔離して食器其他の器類も別にすることが大切であります、然し實際に於きましては之が豫防は殆んど出來ぬものであります。

塵埃は呼吸器疾患に大なる關係を有するものでありまして、凡ての呼吸器病の原因となるものでありま

す、夫故常に塵埃を吸入する職業のもの、例へば大工、石工、紡績工女の如きものには氣管枝炎、肺結核等の多きはよく人の知ることであります、塵埃を吸入することは塵埃そのものが有害である許りでなく、時としては結核の黴菌等が空中に飛揚してそれが塵埃と共に吸入せられて肺結核となる樣なことがあるものであります、夫故塵埃を可成たけ少くすることは呼吸器病豫防上最も必要なることでありまして、たとへば撒水、窓口開放、塵埃吸取裝置等を施こしまして出來るだけ塵埃又は有毒瓦斯の除去を圖らねばなりませぬ、轉地療法殊に高山地方へ轉地することの利益は種々ありますけれど、第一に空氣中に塵埃の少いことが最も有利のことでありまして其爲に大に健康を恢復せしむることが出來るものであります。

空氣の乾燥に過ぐるとか、又は刺戟性瓦斯を含有することも呼吸器疾患の一大原因となるものであります、夫故煖爐其他を用ゐて居室を暖むる際には、水蒸氣發散裝置により室内の空氣の濕潤を保持することに力め、又刺戟性瓦斯惡臭を放つもの等がありますれば直ちに充分なる換氣法によつて之を除去せねばなりません。

鼻は其内にある毛によつて空氣中の塵埃を濾過し、之に一定の濕度を與へ之を適度に濕める作用を有するものであります。夫故若し鼻に一定の病氣があつて鼻呼吸を妨げらるゝ時は、外界の空氣は乾燥し冷却し、且多量の塵埃を含める儘で直ちに呼吸器に入りますから、爲に慢性氣管枝加答兒、喘息、肺氣腫其他種々の呼吸器病を發するものであります、夫故鼻に一定の病氣がある際には速に適當の治療を施こすと云ふことは呼吸器病豫防上大切なことであります。

感冒は諸種の呼吸器病の主なる原因となるものであります、而して感冒は普通身體を甚しく冷却するとか、又は氣溫の急劇の變化に逢ふ時に發生するものであります、斯る際には體內の血行に變調を來しま

して其局に粘膜の抵抗力を減殺し、黴菌の繁殖を容易ならしむるものであります。然し寒氣又は急劇なる**氣温の變化に逢ひましても、身體皮膚の强壯なる**ものに於きましては容易に感冒に罹ることはありませんけれど、元來皮膚薄弱なるものは直ちに感冒に侵されます、夫故感冒に罹らぬ樣にするには皮膚を丈夫にすることが最も大切であります、而して皮膚を强壯にするには如何にすればよいかと申しますにこれは普通冷水摩擦法、冷水灌注法、冷水浴等が行はれて居ります、此等のものゝ内でその何れを選ぶべきかは個人の體質によつて大に異なつて居りまして、極めて强壯な人でありますれば何れの方法を行ふも差支はありませんけれど元來筋骨薄弱の人でありますれば始めより高度の寒冷に暴露するが如きは決して、策の得たるものではありません、此内で冷水摩擦法は如何なる人が行ひましても有害のものではなく、必ず一定の效果を有するものであります、身體甚だしく虚弱のものでありますれば先づ温き時候に之を始じめ可成外氣の直接に來らぬ場所たとへば浴室等にて行へば便利かと存じます、冷水灌注法**及び冷水浴は身體强健なる人にのみ行はるべき方法**でありまして元來虚弱なる人には到底御勸めすることは出來ません。

衣服は、毛織物は他の織物に比し熱を傳導すること少く從つて感冒豫防には最も都合のよいものであります。濕潤せる衣服、又は靴は放濕量が最も多くありますから斯るものは直ちに取換へる樣に注意せねばなりません。

既に呼吸器病に罹つた際に如何に之を治療すればよいかと申しますに

第一、清淨なる空氣中に居ること
第二、呼吸氣道に於ける粘膜の刺戟を去ること
第三、氣道粘膜より生ずる分泌物たとへば喀痰の如きものを除去すること
第四、咳嗽の處置を行ふこと
第五、窒息の危險を去ること等であります。

呼吸器病に於きましては、淸淨なる空氣を得ることは最も大切なことであります、外氣中に散歩し得る患者に於きましては淸淨なる空氣を得ることは比較的容易でありますけれど然らざるものに於きましては換氣法を充分にして室内の空氣を淸淨に保たねばなりません、都市は一般に塵埃多く殊に東京市の如きは極めて塵埃多き處でありますから病室は可成道路より遠く離れたる家屋の後面に選むことが必要であります。又就牀の必要なき患者は山水明眉の地に轉地療養せしむることが最も利益でありまして他の如何なる方法も之に及ぶものではありません。

近來患者に充分に著衣せしめて、外氣中に安臥せしむる療法が啻に肺結核のみならず其他慢性呼吸器病患者に效果があると云ふて適當なる設備を有する療養院に於ては盛に行はれて居ります。

寒冷時に晝夜各々別室を選んで患者を起臥せしめ交互に一室を開放通氣せしめ置くを利益とする人があります、又冬時山上生活をすれば輕症呼吸器病患者には比較的好良なる成績を得らるゝと云ふことであります。

轉地療法は高山、海岸、溫泉地等何れも有效であります。

袪痰は多く藥物によつて行ふものでありますけれど、空氣中の多量の濕氣は又袪痰の作用を有するものであります。一般に濕氣は粘膜の刺戟を輕減し、且滲出液を溶解せしむるものでありますから一定の裝置により空氣の濕度を高むることは大に利益なるものであります。

呼吸器病の際には、屢々吸入療法が行はるゝものであります、吸入に用ゆる藥物は種々ありまして其目的も亦一樣ではありませんけれど吸入は袪痰の目的に使用せらるゝ場合が最も多くあります。喀痰が粘稠でありまして呼吸氣道の粘膜に附著して容易に喀出せられず爲に咳嗽が頻發して患者は非常に苦痛を感ずることがあります。其際亞爾加里劑卽ち重炭酸「ナトリウム」等の吸入を行ひますれば喀痰は融解し

て粘膜面より離れ容易に喀出せらるゝ様になります。既に喀痰が出で去りますれば氣管枝粘膜の刺戟を去りて自然に咳嗽も出なくなるものであります。咳嗽の處置としては、喀痰を去ることが最も大切でありまして、喀痰が充分に排出せられますれば多くの場合に於ては咳嗽も沈靜するものでありますけれど、時としては乾咳と申しまして少しも喀痰がなくとも咳嗽が頻發することがあります、其時は麻醉劑を用ゆることによつて患者を安靜ならしむるものであります。

呼吸氣道に於ける粘膜の刺戟は、多くは塵埃煤煙有毒瓦斯等によつて發するものでありますから、前申上げました通り空氣を淸潔ならしむることによつて其大部分を除去することが出來ます、然し其他氣候の劇變及び寒冷の空氣等も亦呼吸器粘膜を刺戟するものでありますから呼吸器病患者の病室は冷き空氣の進入を防ぎ煖室裝置によつて室温を除り下降せしめず常に一定の濕度を保つ様に注意せねばなりません。

窒息は重症呼吸器病の際に於てのみ發する症狀でありまして、之が豫防及治療法は醫師の周到なる注意を待つて始めて行はるべきものであります。




## 育兒瑣談

ドクトル　三田谷啓

### 軟教育

こどもの身體が充分健全に發育するには榮養品が正當でなければなりませぬ。適當の榮養品が適當に調理せらるゝことが大切であります。榮養品はこどもの年齡に應じて鹽梅されねばなりませぬ。哺乳兒の時代には乳汁が第一の榮養でありますけれども已に

こどもが二歳になるとその榮養の趣はかはつて參ります。即ち身體の方では種々の固い榮養を要求するやうになるのであります。それ故ちやんと齒が生えて固い者をかむ作用が起つて參ります。齒が澤山生えて居るのに尙ほ乳汁を主として榮養品とすることはよくありませぬ。母親のうちにはこどもが離乳を欲しませぬから可愛相ですと云ふて三歳のこどもにも尙ほ自分の乳を與へたりする方があります。これはつまり誤れる愛でこどもの爲めにならぬのみならず、却て不良の結果に陷ることがあります。兒童の教育に從ふ人々は愛情を本とすることは必要でありますが、誤れる愛は何の役にもたゝぬ、時によつて害になることがありますから。愛情は合理的でなければなりませぬ。こどもの爲めならば時には苦い藥をのませねばならぬこともあります。

こどもに無闇と消化し易きもののみを與へては却て惡い。即ち消化器は消化に勞力を用ひぬため器官が弱くなります。消化器ばかりではない、皮膚にしても同じことです。徒に過剩の衣服をこどもに纏はせて置くと皮膚の抵抗力が大に減弱して後には少しのことにも抵抗し得ず、さては風を引いたりするやうになるのです。

要するにあまりこどもを大切にし過ぎると却てこどもを弱くし又わるくするやうなことになります。軟教育の弊害はよく獨子に於て見らるゝところであります。愛の誤用は兒童教育の上に最も注意を要することであります。

## 硬教育

軟教育と反對に硬教育と言ふものがあります。一言にして云ふと兒童に奮鬪的生活をさせるのです。軟教育を消極的とすれば硬教育は積極的であります。即ち兒童の身體の抵抗力を增加せしむる教育法であります。食物は申すまでもなく、衣服を薄著で、更に進んで身體の練習をやらせると云ふわけです。兒童身體の發育に最も效ありと認めらるゝは練習であります。例へば雪のふる寒い日に兒童をいたはつて、

家の中で炬燵にあたらせて置くのは所謂軟教育で、硬教育の方は外に出てこどもの思ふまゝに活潑なる運動をさせる如きものである。一體何物でも使用せずに置くと錆が出たり、動かなくなつたりするものである。人間の身體も用ひずに居ると使用が困難になる。長い間病に罹つて横臥せし後、恢復して歩いて見ると中々脚が十分用ひられない。例へば腸窒扶斯等に罹つた人はよく經驗して居るところである。これは永く使用せざりし爲め機能が一時減弱してくるのであります。それであるから身體が發育して行く場合に一定の刺戟が必要となるのです。身體運動は一種の有力なる刺戟であります。筋肉や骨は身體の重要部分を形成するのでありますから此部分を運動して發育を扶けると云ふことは極めて大切のことであります。これによつて身體は抵抗力を增し且適當の發育を遂げるやうになるのです。榮養品にしても同じことであります。軟教育のやうに消化器の勞力を極度に輕からしめんと謀るのではなく、適當の固形物を與へ、齒牙にてよく咀嚼し、胃腸も相當の勞力を用ふるやうにするのがよいのです。

こどもが起立したり、歩いたり、走つたりするのは下肢の發育に重要の意義あるものであります。又玩具を以て遊び戯るは腕と手の發育に都合がよろしい。それにも關らずこどもに、大人らしく大人らしくと強制することは人工的にこどもの發育を制止させるやうなものであります。

既にしてこどもが學校に行くやうになると學校生活による種々の影響を受けます。例へば一定時間腰をかけて居ること、身體及び精神の緊張の如きものであります。又多數の生徒が室內に居ることも肺臟に不良の影響がありますから、これ等の不良の影響を補ふため放課後は充分運動することが大切であります。

要するに硬教育も極端に過ぎては害がありますが適當に行はれることが大切であります。即ちこどもはこれによつて身體はよく發育し且抵抗力を增加する

からであります。

## 衣服と教育

子を持てる親のうちに衣服の意義を誤つて居る人が佳なり多くあります。衣服はこどもに仕へるものであります。こどもが衣服に仕へることは不合理である。然るにこどもの華美贅澤の衣服を纏せて自由運動を妨げる無情の母があります。こどもは自由に飛び廻つて遊びたいが著物をよごしては叱られるから思ふ存分遊べない、從てよい著物を著せて貰つても有り難くないのであります。母親のうちには著物を汚したこどもを無闇に叱りながらこどもの身體に怪我はなかしりかと注意せぬものも少からぬやうである。衣服の要は生を衞るのであるから衞生的に調製するのが第一の條件であります。即ち淸潔に仕易く、單簡で且安價で、實用的のものがよいのであります。

女の子を早くから華美の惡風に染ませることは教育上大に注意すべきことであります。一度女の子に華美を誇る精神を起させては、到底とりもどしはつかぬ。そして女子は我が華美の姿を他人に示して誇り且他人を侮辱するやうになるのである。かくて貧しき家の子女は自己の不幸をかこち、虛榮の望達し難きを知りては罪を犯し或は死を欲するものすらあるのである。十歳や十一歳で既に化粧の外に何事をも辯へぬ少女が居る。そして流行を追ふことを自己の生命の如くに考へて居る。流行と美術とは同じものではない。兎も角幼少のこどもに華美の衣服をまとはせて、これを他人に誇らしむるが如きは教育上最も注意すべきことであります。

## 保護者に對する兒童衞生上の注意

左記注意書は滋賀縣蒲生郡八幡尋常高等小學校に於て保護者に對して兒童衞生上の注意項目を示したる

ものにして、頗るその要を得たるものと思はる。

一、兒童出校前の注意

一、兒童は出校時間に差支なき範圍に於て、充分の睡眠を取らしむべし。

二、兒童にして早起し能はざる者は、身體に何等かの缺點ある者なれば醫師の診察を請けて其指示に從ひ矯正すべし。

三、兒童離褥する時は、必ず盥水を取らしめ、歯磨粉及楊子を以て歯を掃除せしむべし。

四、朝食はなるべく多量を取らしむべし、辨當は約十町以上の距離なる時又は特別の場合、例へば晝は家人の不在なる時なるべし。

五、辨當はなるべく單純なる品物にして、新鮮清潔及腐敗のをそれ無きものたるべし。

六、兒童には手拭、鼻拭、便所用紙を携帶せしむべし。

七、兒童の身體につき概ね左の容態を觀察すべし。顔色、勢氣、咳嗽、眼病、耳漏、皮疹、濕疹、白癬、頑癬、禿頭等

八、以上の諸病は素人にても直に目につくものなれば、若し之等を見出す時は速に醫師の診療を受くべし。

二、兒童歸宅時の注意

一、兒童歸宅したる時は、直に石鹸を以て頭、顔、手足を洗はしめ、且つ含嗽せしむべし。

二、晝の歸宅には、右の事柄を爲すべき時間なきも、手を洗ふことゝ含嗽は必ず之を爲さしむべし。

三、衣類を交換せしめ、此際再び出校前の如く兒童の身體に注意すべし。

四、學校より書類を受取り、又は注意を受けたる事なきやを訊問し、若し告知票を受取りたる時は精讀の上不審の點は學校へ尋ぬべし。

三、平常の注意

一、過食と間食は唯だ胃腸を害するのみならず、腦力に障碍を及ぼし、又食物に好嫌あるは一種の異常なるを以て宜しく矯正すべし。

二、兒童の喫食中に用事を命じて中途に立しむべからず。

三、兒童の遊戯は他に迷惑を掛け、自分また危險と品性を破らざる程度に於てなるべく劇烈ならしむべし。

四、「シヤツ」「パッチ」「エリマキ」「タビ」「テブクロ」は特別の時の外なるべく用ひしめず、且つ輕裝せしむべし。「ガイトウ」「マントウ」また屋内の帽子は絶對に廢すべし。

五、午睡と夜分の遲寢とは必ず禁ずべし、又夜間來人の爲に無益に兒童を熟睡より醒起せしむべからず。

六、兒童の傍にては飲酒喫煙を愼み、殊に男兒には酒器、煙具を取扱はしむべからず。

## 四、休暇中の注意

一、兒童の無爲徒然は身體に最も害あり、故に腦力の増進（日課復習）身體の運動を充分ならしむべし。

二、旅行は精神及筋骨の發達に最も有益なるが故に適當の方法によりて出來得べきだけ之を爲さしむべし。

三、虚弱なる兒童は、醫師の指示に從ひ海水浴、溫泉、其他適當の處置を取るべし。

## 五、旅行時の注意

一、修學旅行の前夜には嬉さの餘り熟睡せざること多きが故に、なるべく精神を鎭靜せしめ充分安眠せしむべし。

二、朝食も亦精神興奮のため、大抵は少量なるを以て之れ亦なるべく多量に取らしむべし。

三、辨當は握り飯とし内に梅干の小片を入れ、必ず外面を燒き、且つなるべく多くを携帶せしむべし。「カヤクメシ」「スシ」副食物は決して用ふべからず。

四、水筒は必ず用意せしむべし、始め熱湯を二三回通じ置き煮沸したる水又は茶を容るべし。

五、宿泊を要する場合には、枕及蒲團、敷蒲團の

緣を包む爲に、新しい手拭又は手拭大の晒木綿三枚、安全針十本程を用意せしむべし。

六、手拭、鼻拭、便所用紙、石鹸、齒磨粉、楊子等は必ず用意せしむべし。

# 家庭衞生

## 用心教草（一）

石橋臥波

一

「用心に國亡びず」といひ、「敵國外患なき時は國危し」などいふのは、何れも、用心の大切なことを示した諺である。用心とは、常に心を細かいことにまで用ひて、油斷をせぬことで、「火の用心」といへば、火について注意を怠らぬやうにすることである。この用心は、國の上や、外部の火や水についてばかりでは無く、實に、一個人の身の上、心の内についても最も肝要なことである。このごろ、「安全第一」といふ言葉が、流行して、ドーアにまで「安全第一」と書いた札が貼付けられるやうになつたが、この「安全第一」も實は、「用心」の異名に外ならぬのである。

自分は、この頃、若い母親が子供を育てる上に、用心すべき事柄と場合とを、各方面の人々から聞き得た序でに、大人自身が用心すべきことをも集めることが出來たので、これらを取り交ぜて、次々に書いてみることにした。しかし、用心といつても、從來世に出て居る育兒衞生などの書物の中にあるものとは違つて、怪我をせないことなどに重きを置いた材料であることを、豫め、ことはつて置く。

二

正月といへば、雜煮餅は定例であるが、これは、齒固ともいひ、もとは、元旦に、猪の肉など、堅い物を喰ふ儀式であつた。齒は、「よはひ」とも訓み、

人の命とするものであるから、命をかためて延ばすことを祝ふためにしたのであるが、その遺風が、鏡餅や、雜煮餅を喰ふやうになつたのであらう。

さて、この餅は、滋養分が多くて、消化も、よいといふのが、今日の生理學者や、醫學者の説であるが、とにもかくにも、下戸の好物として、餅の好きなものは、驚く程澤山食べる者があるが、その割合に、胃を損はないのを見ると、消化は、惡るくはないのであらう。

そして、ある地方では、雜煮餅を喰べたら、必ず、餅を煮た汁を飲むと、餅が胃腸を害することはないと言ひ傳へられて居る。若し又、餅で胃腸を害した時には、餅を黒燒にして呑めばよいといふことも、古くから言ひ傳へられて居る。餅について、用心すべきことは、餅——特に雜煮餅は、子供が、喉にかけることがよく有るものであるから、小さい子供に雜煮餅を食べさす時などには、箸で、小さく切つて、汁でぬらして、食べさせるやうにせなければならぬことである。昨年の暮に亡くなつた夏目漱石氏の「我輩は猫である」の中には、猫が、雜煮餅の殘りを喰つて、喉にひつかけて、生きる死ぬるの目にあつたことが書いてあるが、ひとり、猫ばかりではない。人間の大人や子供が、元日早々、雜煮餅を喉にひつかけて、目を白、黒にして、苦んだ例は珍らしくはないのであるから、よく注意しなければならぬ。

太田醫學博士の談に、小兒が胃腸をそこなつて入院するもの丶中に、大福餅や、カステラを澤山食べたのが病原になつたのが、隨分あるといふことであるが、大福餅は、中に餡が入つて居て、軟かいので、素人は、消化が惡るくはないと思つて、子供に與へ過ぎるのであらうが、これは、陂たる人々の、特に注意せねばならぬところである

更に、餅について注意せねばならぬことは、老人や、若い者でも、入齒や、金冠などをして居る者は、餅の粘り強いために、入齒が、餅と一緒になつて、喉にひつかゝることがあるといふことである。自分が

知つて居る一例は、餅を食べるはずみに、入齒が餅と一緒になつて、喉にひつかゝつた爲に、遂に窒息して死んだのがある。餅ばかりではない、粘り氣の强い物を食べる時には、入齒をして居る者は、常に氣をつけなければならぬ。

附記。これは餘談であるが、餅は、古くは、小麥團子であつたが、後には、糯米にて搗いてつくるやうになつたものらしい。糯米といふ名稱は、和名抄にも出て居るから、平安朝時代には、糯米で、今頃のやうな餅をつくり、小麥の粉をこねたのは、專ら、菓子、その他のものに用ひたであらうといふことである。

鎌倉時代頃には、餅の種類に樣々なものがあつたやうである。

一、霰餅（四角に切つて、炒豆など交せたもの）。

一、鶉餅、はちぶさ餅（餡が入つてふくれた餅のこと。はちぶさ餅は、今の大福餅のことである。

一、あんぴん（餡餅のこと）。

一、せんざい餅（赤小豆の汁に入れる餅のことである。せんざいは善哉で、年の初めに、餅を祝ふことをいつたものらしいのであるが、それが、遂に、餅の一種の名稱になつたのであらう）。

一、かき餅（二種ある。今頃の牡丹餅といふも、萩の花といつて、この中に入つて居たのである）。

一、自在餅（餡を餅の上につけたもの、今の、あんころ餅のことである）。

正月の雜煮餅には、東京のやうに、切餅を燒いて雜煮にするのがある外に、丸餅を、白味噌の汁の中に入れるのがある。又、丸餅を、醬油汁の中に入れるのもある。更に、善哉餅を正月元日に食べる地方もある。善哉といふのは、東京でいふ「小倉じるこ」のやうにしたもので、砂糖を加へると加へないのとがある。

正月十五日、餅の粥といつて、平安朝時代には、粥杖で、男女の腰を打つたことがある。農家では、

菓物のなる木を、鎌などで切りかけて餅の粥を供へて、多く實を結ぶ禁厭にする風習が今も、地方によつては行はれて居る。

十五日に、門松や、七五三飾を燒く左儀長の火で燒いた餅を食べると、夏病みをせぬといふ風習も、ある地方では、尙行はれて居る。

或地方では、農民が、その年の豐作を、神に謝するために、神官を招して荒神神樂といふことを行ふ。

その最後の行事の一つに、餅を灰燒にして、それを、神官が、嫁と姑とになつて、長い丸竹の箸で、奪ひ合ひをすることがあるが、これは神事に世態を寫す狂言が附け加へられた餘興であらう。



# 雜報

## ○皇后陛下の御仁慈

皇后陛下には畏くも夙に社會事業に對して深く御心を注がせ給ひ、十七日には大森皇后宮大夫を東京養育院に差遣はされ、親しく院狀を御下問相成り、十八日には更に院長澁澤男を御召しありて其起原竝に狀況に就き詳しく御聽取あらせられたる上、在院の老幼に對し御菓子料金五百圓を賜はり、澁澤男は申すに及ばず之に立會へる井上知事も感泣し、大森大夫を經て御禮の執奏を乞ひて退出し本院及分院理事者に對し有難き趣を傳へたりと。

## ○御救恤

大正五年十一月二十九日夜青森縣下古間木驛附近にて汽車の衝突あり、數多の死傷者を出したる趣御聞

き遊ばされ、兩陛下より金七百圓を青森縣に下賜せられたり。

○鷗友會の慈善市

東京府立第一高等女學校鷗友會にては舊臘二十九日下谷の長松寺にて、萬年町の貧民の爲め慈善市を開きたり、物品は各會員、教職員、生徒等の家庭より持ち寄りたるものにて、古著、古足袋、古手袋の類、合計二千點、之に破格の安値を附け（銘仙古羽織五十錢、古足袋五十足一錢の如き）一人三點限として入場券所持者（券は兼て萬年小學校の兒童の家庭に頒ちたり）に賣渡したるが、彼等の喜びは非常にして、賣上高は二千點にて五十八圓、是も同町貧民へ歳暮に與へたりと。

○衛生展覽會

鹿兒島縣の主催にて大正五年十二月十二、三日兩日日置郡東市來村湯元湯田尋常小學校にて衛生展覽會開かれ、五千餘人の觀覽者ありて盛況を呈したりと云ふ。

○「カルチウム」煎餠

廣島縣糸崎療養院高須良樹氏は、飲食物中「カルチウム」存在によりて腺病質及び結核發生を豫防し、既に發せる結機病機に向て治療的效果ありとの事實に基き、「カルチウム」煎餠の製作を企て、專門家三宅某氏に囑して風味共によろしく而も「カルチウム」含量の多からんことを期し、苦心研究の結果遂に約九%の割合に「カルチウム」鹽類を含有する一煎餠を世に出し、國民保健の上に貢獻せんことを期せり。

○結婚年齡の推移

統計年鑑によりて女子の結婚年齡を調査するに、明治三十五年には滿十五歳までに結婚せる者六百七十七人ありしが、此の早婚は年々減少して、明治四十四年には百五十六人となり、其後は愈々減少せり、之と反對に増加せるは二十歳より二十五歳まで、二十五歳より三十歳までの結婚なり、尙三十歳以上の結婚數に至つては著しく増加し、即ち次の如し。

| | 明治三十五年 | 四十四年 |
|---|---|---|
| 二十五歲以上三十歲まで | 六萬二千餘 | 七萬一千餘 |
| 三十五歲迄 | 二萬七百餘 | 三萬一千餘 |
| 四十歲迄 | 九千七百餘 | 一萬四千餘 |

### ○林間學校設置

結核豫防撲滅を標榜せる白十字會は、結核豫防の積極的方法として、結核に罹り易き未だ結核に罹らざる、虛弱なる學齡兒童を、健全活潑なる兒童及び既に結核に罹り居れる兒童或は家族より分離し、空氣新鮮、設備整頓、注意周到なる保護の下に、極力身體の强健法を施せる體育を本位として小學教育を授け、以て結核の侵襲を避けしむるの目的を達せんとて林間學校を設立せらる計畫あり。

## 廣　告

### ○入會者

○高木鎌子紹介

牛込區若宮町三十七番地　特別　川田常子

○長門久壽子紹介

支那上海四川路朝日街二二號　通常　大西咲子

○中野治紹介

熊本縣上益城郡白旗村　通常　富永富子

宮崎縣兒湯郡上穗北村字島ノ内　通常　黑木かち子

福岡市大名町七番地　通常　鹽田壽子

○莊司紹介

熊本縣人吉町　通常　荻原求子

### ○轉　居

巣鴨より靜岡縣庵原郡興津町清見寺へ　山梨識子

千駄ヶ谷より小石川區大塚仲町二八一へ　野口良子

兵庫縣より府下千駄ヶ谷八八一八　椿高子

四谷區より四谷區大番町二三八　篠原昌治

麻布區より麻布區鳥居坂町一三へ　門野駿子

麴町區より赤坂區新町三ノ四五へ　矢島かち子

以上



# 私立大日本婦人衛生會役員氏名

總裁　東伏見宮妃周子殿下
會長　侯爵夫人　鍋島榮子
副會長　男爵夫人　濱尾作子

（いろは順）

幹事　鳩山春子
同　岡田德子
同　山本多穗子
同　松平芳子
評議員　入澤常子
同　濱田捨子
同　仁禮壽賀子
同　土肥多越子
同　岡山とし子
同　男爵夫人　加藤鈴子
同　吉岡彌生子
同　高橋孝子
同　武田貞子
同　男爵夫人　南部隈子
同　山口貞子
同　古市幸子
同　近藤憲子
同　天野多喜子
同　菊池峯子
同　宮本樂子

同　長谷川仲子
同　高木鐐子
同　三浦敬子
同　羽田三緒子
同　服部繁子
同　西升子
同　緒方悅子
同　小川孝子
同　片山龜子
同　丹波貞子
同　田村きよ子
同　鶴原誠子
同　中濱芳子
同　子爵夫人　松井正子
同　小松いさ子
同　伯爵夫人　阿部篤子
同　岸澄子
同　三宅藤子
同　守屋千代子

## 婦人衛生雜誌代價及廣告料

### 代價

一冊　定價金貳拾錢　郵稅壹錢
三冊（三ヶ月分）　前金郵稅共　金四拾五錢
十二冊（一ヶ年分）　前金郵稅共　金壹圓八拾錢

### 廣告料

一頁六十二行　一行二十三字
壹頁　金五圓　半頁　金貳圓五拾錢
○特別廣告　壹頁金拾圓　半頁金五圓
○半頁以下行數ヲ以テ計算スルモノハ一行貳拾五錢

### 規定

○本誌講讀申込ノ節ハ前金三ヶ月分以上本會事務所宛ニ送附セラルベシ但シ見本ハ郵券ニテ貳拾壹錢代用苦シカラズ○本誌休讀ノ節ハ速カニ報知セラルベシ通知ナキ分ハ講讀者ト見做ス但シ後金ニハ割引ナシ○轉居ノ節ハ新舊宿所通知セラレタシ


大正六年一月十七日印刷
大正六年一月二十日發行

編輯者兼發行者　東京市本郷區駒込千駄木町五十八番地　莊司秋次郎
印刷者　東京市本郷區駒込林町百七十二番地　櫻井新三郎
印刷所　東京市本郷區駒込林町百七十二番地　杏林舍

發行所　東京市本郷區駒込林町二番地　私立大日本婦人衛生會事務所

賣捌所
東京市本郷區龍岡町　吐鳳堂
同市銀座四丁目　東海堂
同市京橋區鎗屋町　良明堂
同市本郷區本富士町　明文館
同市同區春木町　南江堂支店
京都市寺町二條南入　若林茂一郎
東京市日本橋區吳服町　北隆館
同市神田區表神保町　東京堂
同市本郷區本富士町　盛春堂
名古屋市榮町六丁目　丸善書店